

親育てプログラムの効果に関する研究 — 3年間の母親の子育て意識の変容を中心に—

A Study on the effect of a program for parents raising — On the Change of the child-nurturing consideration for 3 years—

名須川 知子* 楠本 洋子**
NASUKAWA Tomoko KUSUMOTO Yoko

The present study uses the child-nurturing consideration scale, and is a verification of the effect of support. First of all, the questionnaire survey of mother who had the child frequented the kindergarten developed mother's child-nurturing consideration scale. The meaning of the scale analyzes, considers child-nurturing consideration, and verifies the effect of child-nurturing support. As a result, child-nurturing support "Parents raising program" executed for three years in A-kindergarten was paid to attention, the questionnaire survey of six times in total was executed, and the effect was verified from the result according to each fiscal year. There was no change in year first and second. "Child care responsibility" is rose in year third.

本研究は、子育て意識尺度を活用して母親の意識の変容から子育て支援事業の効果を検証したものである。まず幼稚園に子どもを通わせる母親のアンケート調査から母親の子育て意識尺度を開発した。その尺度の意義は、母親の子育て意識を分析・考察し、子育て支援の効果を検証するためである。次にA幼稚園で3年間実施された子育て支援「親育てプログラム」の、初年度3歳児の母親に着目して、年2回、計6回のアンケート調査を実施し支援の効果を検証した。その結果、下位尺度において3歳児時、3歳児から4歳児時において変化は見られなかったが、4歳児から5歳児時において「育児責任」が有意差で高くなった。「育児責任」の向上は、親としての育ちが示唆され、「親育てプログラム」は子育て支援の本来の目的である「親育ち支援」として効果ある支援であると実証された。

キーワード：子育て支援 検証 子育て意識尺度 親育ち 3年間の効果

Key words : child-nurturing support, verification, child-nurturing consideration scale, parents raising, effect of 3 years

I. 問題と目的

わが国における子育ては、子どもを産んだ母親を中心に近親の人々の援助を受けながらの子育て時代を経て、現代のような母親・父親を中心に社会的支援を受けながらの子育てへと変遷している。この社会的支援である子育て支援には、ここ約20年間に「少子化」の名の下に政府が打ち出した政策の流れがある。子育て支援の当初は、場の提供をはじめ、相談、情報、講座の提供などが支援者主導で行われる子育ての「肩代わり支援」が主流であった。その後、関係者の協力や叡智を集めた研究を重ねながら導かれた対策の試行錯誤がなされている。そこで今日の子育て支援は、「親を育てる」、「『地縁』を『子縁』で取り戻す」¹⁾、「支え、支えられる関係」²⁾という視点が必要であると言われ、地域を基盤とした統合的・計画的なボトムアップへの潮流³⁾へと展開されようとしている。

このような子育て支援をより効果的なシステムにするためには、今なされている支援の効果の検証が必要である。現在の研究では、「子育て支援の実施・活動内容」、

「子育て支援のあり方」、「子育て支援の現状と課題」、「子育て支援の考察」、「子育て支援の役割」、「子育て支援の意義」、「子育て支援の可能性」、「子育て支援の取り組み」など実施に関するものが多く、子育て支援の効果や評価に関する研究は少ない^{注1) 注2) 注3) 注4)}。過去3年の日本保育学会大会発表論文集でも、特に継続して実施している子育て支援に対して、子育て意識尺度を使用して多年度にわたり、支援効果を検証しているものはなかった^{注5) 注6)}。

従って、本研究では子育て意識尺度を開発し、A幼稚園に幼児を託している母親が、幼稚園で実施された3年間の「子育て支援」に参加することによる子育て意識の変容を明らかにし、子育て支援効果を検証するものである。以前の研究から、A幼稚園の子育て支援事業の「親育てプログラム」は、預かり保育だけの支援の幼稚園に比べ、子育て意識の「育児肯定」を向上させる効果があることが明らかになっている^{注7)}。そこでさらに3年間の幼稚園の保護者として、どのような効果がいづ現れるか詳細に検討した。

なお、本来子育ては夫婦ともに行うものであるが、いまだ育児・子育てを中心に担っているのは母親である。そこで母親の子育て意識に着目し、子育て意識の変容を把握・分析することにより、子育て支援の効果を検証するものである。

Ⅱ. 子育て意識尺度の開発

1. 目的

母親の子育て意識尺度の開発の目的は、幼稚園に子どもを通わせる母親の子育て意識を分析・考察し、子育て支援に参加することによる母親の子育て意識の変容から子育て支援の効果を検証する尺度とするものである。

2. 調査方法

- (1)調査対象：①下記に示しているように他機関で使われている尺度を参考にアンケート調査をした。A 幼稚園に通う幼児を持つ母親144名を対象とした。②インタビュー調査（以下、母親インタビューという）は、A 幼稚園に通う幼児を持ち子育て支援参加の母親8名を対象とし、内6名は子育て支援の企画参加サポートの母親で、あとの2名は子育て支援参加のみの母親である。
- (2)実施期間：①アンケート調査は、2006年7月に実施した。②母親インタビューは、2007年2月に実施した。
- (3)手続き：①アンケート調査用紙は、調査の目的・倫理的配慮を書面で記し、無記名とし、調査に同意を得られた対象者に担任から直接手渡し、自宅で記入をしてから幼稚園に提出する。②母親インタビューは、事前に調査の目的・インタビュー内容・倫理的配慮などを書面に記し、インタビューに同意が得られる対象者を園を通じて募った。インタビューはA 幼稚園の会議室において実施した。インタビューは母親と筆者の1対1で行い、ボイスレコーダーを使用して録音した。所要時間は、1人約20分から約65分間であった。
- (4)調査内容：①アンケート調査項目は、2002年3月のK市教育委員会におけるアンケート調査の質問項目を参考に、「子育てのプラス面・マイナス面」、「子育ての悩み・相談」、「子育ての援助」、「子育てと自身の人生観」、「育児責任」を想定した43項目とし4段階評定を用いた。また個人の属性として母親の年齢や就労形態、子どもの数、親との同居の有無などを合わせて作成した。②母親インタビューは、家族構成、就労経験・気軽に相談できる人の有無・子育ての悩み・困っていること・不安なこと・配偶者の育児参加の程度・子育て支援についてなどを尋ねた。サポーターの6名については、園で実施している子育て支援サポーターとしての感想や要望などを合わせて尋ねた。

3. 調査結果

調査への同意を得られた回答者数は123名であり、回答率は85%であった。子育て意識についての43項目のうち、無回答が比較的多かった「子育て相談の専門機関に行ってよかったと思う」(41%)、「近くに実家があれば、子育てを助けてもらえるのと思う」(20%)、「両親と同居のため、子育てが助かると思う」(35%)の3項目を除いて、重み付けのない最小二乗法（プロマックス回転）による因子分析を実施した。その結果、6つの因子が抽出された。それぞれ第1因子は6項目で「育児負担」、第2因子は5項目で「育児肯定」、第3因子は2項目で「育児相談」、第4因子は4項目で「友人の支え」、第5因子は3項目で「親族の支え」、第6因子は3項目で「育児責任」と命名した。各因子の平均値(M)、標準偏差(SD)、 α 係数(α)については、表1のとおりである。

4. 考察

因子分析の結果から、母親の子育て意識には「育児によって、親は成長すると思うことがある」などの「育児肯定」と、「子育てに余裕がなくなり、子どもにあたってしまふ」などの「育児負担」を抱える中、「育児相談」、「友人の支え」という援助や「実家の母や自分の姉妹に子どもを預ける」などの「親族の支え」、「育児は妻の役割であると思う」などの「育児責任」などが絡みあっていると考察される。このことは、母親インタビューの言葉からも窺うことができる。それは、「子育ては、面白いです。しんどいですけどね。猫の手も借りたいというときもありますが、こどもは親を頼ってくれますし、親の真似もするし・・・こちらがしっかりさせてもらえるので、面白いと思います。」や、「子育ては別に楽しいわけではないですが、自身は子どもを持つことで、人生に対して認識が変わりました。何に対しても許容範囲がすごく広まったと思います。」、「子どもが10ヶ月の頃、友達がほしくて近所のスーパーに往復1時間かけて、ベビーカーを押して毎日「友達できないかなあ」と2ヶ月くらい通いました。でも友達はずきずき、気分をかえて行った児童館で、「今、何ヶ月？」と声をかけられ、仲間に入れてもらった時、本当にうれしかった。」、「夫は仕事の関係で出張が多く家を空けることが多いので、実家の親やいろんな人に相談をしています。」などである。これらの言葉から母親の子育て意識には、子育ては「楽しい」・「面白い」といった肯定感と「大変」・「しんどい」といった負担感の中に、「友達ができてうれしい」といった友人の支えや親族などの相談を含む協力者、それに親としての責任感という要因をあわせもっていることが窺われた。それは今回の因子分析において抽出された子育て支援尺度の6つの因子と一致していると言えよう。

表1. 子育て意識尺度の因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	VI
第1因子 育児負担 (M=2.72, SD=.67, α=.78)						
ウ. 子育てに余裕がなくなり、子どもにあたってしまう	.76	.09	-.05	.01	-.16	.15
イ. 子育てがわずらわしくてイライラする	.74	.01	-.06	.03	.05	.00
マ. 子どもを預けて、ゆっくり体を休めたいと思う	.67	.07	-.11	.09	.15	-.01
ホ. 育児や家事を放棄したくなる	.64	-.02	-.02	.13	.04	.16
オ. 子育てと家事だけの一生はいやだと思う	.48	-.12	.14	.06	.03	-.41
ス. 子育てに悩んだことがある	.47	.27	.08	-.03	-.23	.03
第2因子 育児肯定 (M=3.37, SD=.59, α=.60)						
ニ. 子どもが、園で育っていると安心と思う	.01	.77	-.20	.04	-.10	.10
ヒ. 子育ての悩みが話し合える気軽な場が欲しいと思う	.17	.52	-.05	-.08	.02	-.03
ナ. 子どもが園に行っている間、自由な時間ができたと思う	.11	.48	-.17	.19	.03	-.15
キ. 育児によって、親は成長すると思うことがある	-.01	.43	.28	.13	.08	-.10
ロ. 子どもとの相性は良いと思う	-.20	.40	.15	.13	.01	.04
第3因子 育児相談 (M=3.07, SD=.27, α=.72)						
タ. 子育ての悩みを、友達に相談する	.15	-.16	.82	.10	.07	.00
テ. 子育ての悩みを、園の他の保護者に相談する	-.03	-.04	.67	.01	-.12	-.02
第4因子 友人の支え (M=2.08, SD=.60, α=.74)						
レ. 預かる人は、専門知識を持っていないでもいいと思う	.15	-.05	.06	.68	.03	.01
リ. 近所の友達の子どもを預かる	-.05	.20	.15	.67	-.14	.00
ラ. 近所の友達に子どもを預ける	-.08	.32	.03	.62	-.07	-.06
ル. 預かる人は、専門知識を持っている方がいいと思う	-.03	.16	.12	-.51	.01	-.05
第5因子 親族の支え (M=2.51, SD=.62, α=.71)						
ユ. 実家の母や自分の姉妹に子どもを預ける	-.08	.14	-.14	-.08	.80	.04
ム. 近くに実家があるので、子育てを助けてもらう	.03	-.12	.10	-.05	.75	-.06
ソ. 子育ての悩みを、親に相談する	-.07	-.05	.41	-.01	.44	.00
第6因子 育児責任 (M=2.38, SD=.53, α=.61)						
サ. 育児は妻の役割であると思う	.03	.02	.12	-.01	-.09	.81
ハ. 核家族がよいと思う	.16	.04	-.08	-.07	.13	.55
フ. 祖父母同居がよいと思う	-.27	.37	.10	-.15	-.02	-.42

Ⅲ. 3年間の子育て意識の変容

1. A幼稚園における「子育て支援」の取り組み

A幼稚園は3年保育、6クラス編成で、2006年度から2008年度の3年間「幼児の健やかな心身の成長・発達を育むための保護者の保育力を高める「親育てプログラム」とその評価システムの開発による、幼稚園の教育課程及び地域子育ての在り方についての研究開発」という文部科学省研究開発指定（平成18-20年度）を受けている。研究の概要は、3～5歳児の保護者に対する幼稚園での「親育てプログラム」を開発し、親の育ちが幼児自身の変化につながることを明らかにする、健やかな子どもの育ちを促す親のあり方について具体的な方策を探り、地域の保護者の保育力が周辺に広がりみせるものとなるプログラムを提唱すること。である。子育て支援事業として、保護者の保育への参加として「きっずくらぶ」という名称で保育参観・保育参加・弁当参加、行事等への自主的な参加、子育て講座の開催、子育て相談・子育て懇話会の実施をしている。

2. A幼稚園における調査

2-1. 調査目的

A幼稚園における2006年から2008年の3年間におよぶ母親の子育て意識を子育て意識尺度によって平均値を比較するとともに同時に実施した自由記述や母親インタビューを合わせて総合的に考察し、その子育て意識の変容から子育て支援の効果を検証することを目的とする。

2-2. 調査方法

- (1)調査対象：①アンケート調査は、3年間の子育て意識の変容の経過を明らかにするために、A幼稚園の2006年度3歳児、2007年度4歳児、2008年度5歳児の母親を対象とした。対象人数は、2006年度は44名、2007年度は53名、2008年度は54名であった。②母親インタビューは、Ⅱ. 2. (1) ②と同様である。
- (2)実施期間：①アンケート調査の実施は、2006年度1回目は2006年7月・2回目は2007年3月、2007年度3回目は2007年6月・4回目は2007年12月、2008年度5回目は2008年7月・6回目は2008年12月である。②母親

へのインタビューは、Ⅱ. 2. (2) ②と同様である。

(3)手続き：①アンケート調査の手続きは、Ⅱ. 2. (3) ①と同様であり、A 幼稚園で実施した調査結果を使用した。②母親インタビューは、Ⅱ. 2. (3) ②と同様である。

(4)調査内容：①すべてのアンケート調査質問項目は、Ⅱ. 2. (4)①と同様であり、同時に自由記述欄を設けた。また2007年度と2008年度の調査においては、子育て支援事業が支援になったかどうかを尋ねた。②母親インタビューは、Ⅱ. 2. (4) ②と同様である。

2-3. 調査結果と考察

アンケート調査への同意を得られた有効回答者数（有効回答率）は、それぞれ次のとおりである。なお有効回答者は全員子育て支援の参加者である。2006年度1回目は36名（82%）・2回目は37名（84%）、2007年度3回目は41名（77%）・4回目は33名（62%）、2008年度5回目は32名（59%）・6回目は30名（56%）であった。

得られたデータは、項目の(1)、(2)、(3)、(4)、(5)共通に、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「ほとんどない」を2点、「ない」を1点と得点化し、下位尺度と項目の平均値と標準偏差を求めた。

次に段階的変容と全体的変容を表2の要領で分析を実施した。これらの結果と自由記述、母親インタビューなどを総合的に考察した母親の子育て意識変容は次のとおりである。

(1)3歳児時の変容結果と考察

3歳児時の変容として、2006年度1回目と2006年度2回目の平均値をt検定した結果が表3である。表3より下位尺度に有意差は見られないが、第1因子「育児負担」と第2因子「育児肯定」のそれぞれ1項目に有意な差の傾向が見られた。その内訳は、第1因子の項目「子育てに悩んだことがある」が有意に低くなる傾向であり（ $t(71)=1.84, P<.10$ ）、第2因子の項目「子どもが、園で育っていると安心と思う」が有意に高くなる傾向である（ $t(71)=1.80, P<.10$ ）。この「子育てに悩んだことがある」は、第1因子の中でも母親にとっては大きな負担要因であると考えられる。そのためこの項目の平均値が下がったことは、母親の子育て意識が肯定的方向への効果を示唆していると考えられる。また第2因子の「子どもが、園で育っていると安心と思う」が高くなっていることは、支援に参加することにより、園に対する信頼が深まったことを示唆しており、この2項目の変化は、園に対する信頼の深まりのもと、育児負担が減少し、育児を肯定的に捉える傾向に変容していると考察される。

さらに母親インタビューでも、母親が園で実施している「親育てプログラム」に参加することで、育児を肯定的に捉えるようになった意見が多い。その内容は「子育て講座については、託児ができるようになってからは参加をしました。ピアノの演奏会と料理教室だったので、自分が楽しんだといった感じでした。普段下の子と離れることがなくいつもべったりなので、音楽なんて聴くことがないので、息抜きにもなりました。」や、子育て支援のサポートをしている母親からは、「お母さん方

表2. 変容の分析対象

	タイトル	比較データ	効果検証方法
段階的 変容	(1)3歳児時の変容	2006年度1回目と2006年度2回目	平均値のt検定
	(2)3歳児から4歳児時の変容	2006年度2回目と2007年度4回目	平均値のt検定
	(3)4歳児から5歳児時の変容	2007年度4回目と2008年度6回目	平均値のt検定
全体的 変容	(4)3歳児から5歳児時の変容	2006年度1回目と2008年度6回目	平均値のt検定
	(5)3歳児時,4歳児時,5歳児時の変容	2006年度2回目と2007年度4回目と2008年度6回目	平均値の分散分析

表3. 2006.7 (N=36) と2007.3 (N=37) の比較とt検定結果

下位尺度	2006.7 (3歳)		2007.3 (3歳)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第1因子 育児負担	2.76	.57	2.71	.61	n. s.
第2因子 育児肯定	3.41	.39	3.46	.28	n. s.
第3因子 育児相談	3.12	.59	3.16	.54	n. s.
第4因子 友人の支え	2.03	.78	2.07	.75	n. s.
第5因子 親族の支え	2.62	.89	2.70	.92	n. s.
第6因子 育児責任	2.43	.56	2.44	.52	n. s.

と一緒に企画をすることで、人に甘えることが下手であった私は、「お願い！」が言えるようになり、すごく信頼関係ができるようになりました。まず息子が変わり一下の子はあまり以前通っていた保育所に慣れず、そんなに前向きな子どもではないので、幼稚園に来てもお友達ができなかったのです。一、私も今年1年で、お母さんと深く知り合えたということが、すごい大きな財産でした。」「子育てをしながら、ボランティアをすることが、生き生きすることにつながるのだなということがわかり、いい勉強になりました。」などである。このように1年目の子育て支援の効果は、子育て支援尺度の結果と母親インタビューにあった母親の息抜きや母親同士の信頼関係の構築、母親自身の向上心などの言葉から、母親の子育て意識が肯定的な傾向に変容していると考察された。

(2) 3歳児から4歳児時の変容結果と考察

3歳児から4歳児時の変容として、2006年度2回目と2007年度4回目の平均値をt検定した結果が表4である。表4より下位尺度に有意差は見られなかったが、第6因子「育児責任」の項目「核家族がよいと思う」が有意に高くなる傾向がみられた。(t(68)=1.97, P<.10) この「核家族がよいと思う」と「育児責任」の関連については、「大家族の中では、生活全般の中心を祖父母が握っている場合もあり、親が子どもの教育やしつけの主導権を取られている家族もある。そうした場合、親としての自覚や責任感も育ちにくく、親としての成長が期待できない。子どものしつけも十分でないという状態もみられる」⁴⁾ という調査結果からも「核家族」と「育児責任」

の関係を見ることができる。

一方、自由記述には「参加した時は、とても楽しくやすらいだ気持ちになります。もっと参加したいと考えています。」や「入園当初は、「親」⇔「子」で就園してもまだまだ母親3、4年。下の子も抱え、日々「こんな時どうしたら?」と思うことが多く、どこに聞けばよいのかと思っていたところ、「きつずくらぶ」や子育て講座や子育て相談などの取り組みをなされるようになって、ホッと安心したようなところがあります。」「親が子どもと関わることをあらゆる形でサポートしてくださるので、とても心強く思っています。」「講座時の託児、未就園児も含めた“きつずくらぶ”等、活発に活動、ご支援いただいていると思う。園長先生にはちょっとした悩みも気軽に聞いてもらえ、アドバイスいただけるので、気持ちが前向きになれる。」などである。

このように母親インタビューからは「親育てプログラム」に参加することでやすらいだ気持ちが持てたり、子育てに悩んだ時に安心感が持てたりできていることが分かり、アンケート調査結果からは第6因子の項目が有意に高くなったことが分かった。そのため2年目の効果として母親の子育て意識は、精神的ゆとりの中に「育児責任」という親としての育ちが芽生えてきているように考察された。

(3) 4歳児から5歳児時の変容結果と考察

4歳児から5歳児時の変容として、2007年度4回目と2008年度6回目の平均値をt検定した結果が表5である。表5より下位尺度の第1因子「育児負担」が有意に低い

表4. 2007.3 (N=37) と2007.12 (N=33) の比較と t 検定結果

下位尺度	2007.3 (3歳)		2007.12 (4歳)		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第1因子 育児負担	2.71	.61	2.81	.52	n. s.
第2因子 育児肯定	3.46	.28	3.38	.39	n. s.
第3因子 育児相談	3.16	.54	3.03	.74	n. s.
第4因子 友人の支え	2.07	.75	2.10	.64	n. s.
第5因子 親族の支え	2.70	.92	2.60	.85	n. s.
第6因子 育児責任	2.44	.52	2.59	.46	n. s.

表5. 2007.12 (N=33) と2008.12 (N=30) の比較と t 検定結果

下位尺度	2007.12 (4歳)		2008.12 (5歳)		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第1因子 育児負担	2.81	.52	2.63	.61	t(61)=1.68+
第2因子 育児肯定	3.38	.39	3.49	.29	n. s.
第3因子 育児相談	3.03	.74	2.75	.91	n. s.
第4因子 友人の支え	2.10	.64	2.31	.52	n. s.
第5因子 親族の支え	2.60	.85	2.60	.91	n. s.
第6因子 育児責任	2.59	.46	2.68	.36	n. s.

+:P<.10

傾向である ($t(61)=1.68, P<.10$)。また第2因子「育児肯定」の項目「子育ての悩みが話し合える気軽な場が欲しいと思う」($t(61)=2.54, P<.05$)と、項目「子どもが園に通っている間、自由な時間ができたと思う」($t(61)=2.40, P<.05$)の2項目が有意に高くなっている。さらに第6因子「育児責任」の項目「育児は妻の役割であると思う」が有意に高くなっている ($t(61)=2.25, P<.05$)。これらの結果から、母親は育児責任を自覚しながら、育児を肯定的傾向に捉え、育児負担を減少させている様子を窺うことができる。

その要因として自由記述を見ると、「子どもの様子がよくわかり大変ありがたいです。」「“きずくらぶ”は、保護者同士のコミュニケーションが深まったり、互いに尊敬できたりして、とても良いと思います。」「心の支えになっています。先生がサポートしてくださっていることを強く感じています。感謝の気持ちでいっぱいです。」「園側とつながりがもてているようで安心していられます。」「一番身近で、子ども達のことをよくわかってくださっている園で、実施されているのは、とてもよい事だと思います。安心します。」「家庭とは違う環境で、集団生活をおくる子どもたちの姿を見ることは、我が子も他の子も見直すきっかけになってよいと思う。」「子育て相談で、私も園長先生に話を聞いてもらい、迷いがふっきたこともあり、子どもの対応がこれでいいのだと思えありがたかったです。」「子どもの様子を見る機会が多い、親が子ども集団での生活や遊びの様子を楽しめる機会が多い、先生方との連絡・相談ができるもしくはしやすい環境というのが子育てそれ自体の風通しをよくしてくれていると思います。研究課題でなくなってもぜひ長く続けていってほしいです。」などである。このような子育て支援による保護者同士のコミュニケーションが深まる、互いに尊敬できる、心の支えになる、サポートになる、安心するなどの言葉からは、園と保護者の信頼関係が示唆される。

このような信頼関係の構築のもと、母親の子育て意識の中で一番軽くして欲しい「育児負担」が子育て意識尺度において減少の傾向の結果が出たことや2年目から

芽生えてきた「育児責任」が引き続き高いこと、「育児肯定」の向上傾向などから、親育て支援としてよい効果を生み出していると考察された。

(4) 3歳児から5歳児時の3年間の変容結果と考察

3年間における全体的変容として、調査の最初のデータである2006年度1回目と最終のデータである2008年度6回目の平均値をt検定した結果が表6である。表6より、第3因子「育児相談」が有意に低くなっている ($t(64)=2.02, P<.05$)。また第4因子「友人の支え」が有意に高くなっている ($t(64)=1.68, P<.10$)。そして第6因子「育児責任」が顕著な有意に高くなっている ($t(64)=2.04, P<.05$)。これらの項目に着目すると第3因子の「子育ての悩みを、友達に相談する」が有意に低くなっている ($t(64)=2.08, P<.05$)。この項目の変化が意図することは、子育ての悩みが減少したか、悩みを友人に相談することが減少したのかが考えられるが、第4因子が有意に高い傾向や自由記述、母親インタビューの内容(Ⅲ. 2. 2-3. (1)-(3))などを考慮すると、子育て支援に参加することにより、友人の支えに恵まれ、「支え—支えられる関係」の構築が示唆され、子育ての悩みが減少したと考えられる。次に第6因子が有意に高く示しており、この因子の2つの項目で有意差が見られる。その1つ「育児は母親の役割であると思う」が有意に ($t(64)=1.99, P<.10$) で高くなっている傾向がある。このことは、A幼稚園の母親の属性(Ⅱ. 2. (4))における就労形態において、専業主婦が82%を示していることに関係すると考えられる。すなわち幼児を持つ専業主婦の生活は、子どもを介した社会である園と家を往復する日々の中で子育てに専念しているため、その母親たちが受ける園の子育て支援の影響は大きいと考えられるからである。その支援の結果、親としての育児責任感が高い傾向になるということは親として育つという支援効果が示唆される。もう一方の「核家族がよいと思う」が有意に高くなっている ($t(64)=2.20, P<.05$) が、この核家族と育児責任の関係については、Ⅲ. 2. 2-3. (2)で述べたとおりである。これらの結果から、3年間におよぶ子育て支援に参加す

表6. 2006.7 (N=36) と2008.12 (N=30) の比較とt検定結果

下位尺度	2006.7 (3歳)		2008.12 (5歳)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第1因子 育児負担	2.76	.57	2.63	.61	n. s.
第2因子 育児肯定	3.41	.39	3.49	.29	n. s.
第3因子 育児相談	3.12	.59	2.75	.91	$t(64)=2.02^*$
第4因子 友人の支え	2.03	.78	2.31	.52	$t(64)=1.68^+$
第5因子 親族の支え	2.62	.89	2.60	.91	n. s.
第6因子 育児責任	2.43	.56	2.68	.36	$t(64)=2.04^*$

*: $P<.05$ +: $P<.10$

表7. 2006年 3歳入園児の各年度における得点の平均値と標準偏差 (N=100)

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
2006年度 3歳児 (2回目)	平均値	2.71	3.46	3.16	2.07	2.70	2.44
	度数	37	37	37	37	37	37
	標準偏差	.61	.28	.54	.75	.92	.52
2007年度 4歳児 (4回目)	平均値	2.81	3.38	3.03	2.10	2.60	2.59
	度数	33	33	33	33	33	33
	標準偏差	.52	.39	.74	.64	.85	.46
2008年度 5歳児 (6回目)	平均値	2.63	3.49	2.75	2.31	2.60	2.68
	度数	30	30	30	30	30	30
	標準偏差	.61	.29	.91	.52	.91	.36
合計	平均値	2.74	3.43	3.00	2.17	2.64	2.56
	度数	100	100	100	100	100	100
	標準偏差	.58	.33	.74	.64	.87	.46

ることによって、友人の支えが強くなり、育児相談が減少し、育児責任が向上するという親としての育ちが示唆され、「親育てプログラム」の本来の目的である母親の「親育ち」という子育て支援効果があったと考察された。

(5) 3歳児時・4歳児時・5歳児時の分散分析結果と考察

表7に基づいて、各下位尺度における一要因の分散分析を実施した。その結果によれば、第3因子「育児相談」については、群間において有意な差の傾向 ($F(2,99)=2.69, P<.10$) があり、5歳児時の平均値が3歳児時のそれより下回ることが明らかとなった。さらに第6因子「育児責任」についても、群間において有意な差の傾向 ($F(2,99)=2.33, P<.10$) があり、5歳児時の平均値が3歳児時のそれよりも高くなっていることが分かった。このように育児相談の減少、つまり子育ての悩みが減少し育児責任という親育ちが示唆されたことは、Ⅲ. 2. 2-3. (4)で明らかになったことと一致していると言える。

Ⅳ. 全体的考察

子育て支援の効果を検証するために、まず子育て意識尺度を開発した。その結果、「育児負担」・「育児肯定」・「育児相談」・「友人の支え」・「親族の支え」・「育児責任」の6つの因子が抽出され、これらは母親インタビューの言葉から読み取れる子育て意識の要因と一致していた。

次にその子育て意識尺度を使用して段階的変容と全体的変容を考察した。段階的変容として、子育て支援を受けることによる母親の子育て意識の1年目の3歳児時は、下位尺度において変化は見られなかったが、母親インタ

ビューの言葉から、母親の子育て意識が肯定的な傾向に変容していることが考察された。2年目の3歳児から4歳児時における効果は、1年目同様に下位尺度における変化は見られなかったが、項目による変化を見ることができ、自由記述の言葉からも「育児責任」という親の育ちの芽が育っていると考察された。3年目の4歳児から5歳児時にかけての効果としては、下位尺度において「育児負担」が低くなった傾向にあることがわかった。この「育児負担」は、母親の子育て意識の中で一番に軽くして欲しいことであり、この実現に支援を通じた園と保護者の信頼関係の構築が基盤になり、負担減少というよい効果につながったと自由記述も合わせて考察された。

次に、全体的変容としての3歳児時と5歳児時の比較における3年間の効果は、下位尺度「育児相談」、「友人の支え」、「育児責任」において有意差が見られた。これらが意味することは、母親たちが子育て支援に3年間参加することにより、友人の支えに恵まれ「支え-支えられる関係」の構築が示唆され、子育ての悩みが減少し、親としての育児責任が高くなったと考察された。また、3年間の平均値の分散分析からも、「育児相談」と「育児責任」に変容が見られ、この「育児責任」の向上からは親の育ちが示唆され、「親育てプログラム」という子育て支援は本来の子育て支援としての効果があったと考察された。

今回の効果要因となった育児責任の向上は、子育て意識に親としての責任という自覚の必要性を示唆している。それは子育て支援が「単なる子育ての代替手段」から「親が親として自立できるよう支えていく」⁵⁾ という「親代わりではなく、親が子育てを大変だけれどそのなかで責任を持って楽しみながら子育てができることを支

援するもの」であることを意味している。すなわち3年間の効果として示された育児責任の向上は、子育て支援の本来の目的に沿った支援の効果であったと考察された。

V. おわりに

以上の検証から、まず母親の子育て意識は、1年目・2年目において成長の傾向は見られたものの大きな効果はなかったが、3年目の終わりには明らかに成長が見られた。このことから子育て支援が母親の子育て意識を変容させるためには時間を要することを明らかにしている。また子育て支援の本来の効果として「育児責任」の向上が見てとれたが、その要因には「友人の支え」が影響していることが明らかになった。

これらのことから効果的子育て支援のプログラムは、友人の支えを創出する親同士のつながりを作ることに焦点化し、あくまで親が自発的に参加できるような子育て支援を企画し、親の自立につなげる創意工夫が求められる。また、子育て意識の変容には時間を要することから、支援の継続が必要であると言える。そのため、本研究のような子育て支援効果検証の継続と、検証による評価システムを確立し、親が親として育児に責任を持ち、自主的な子育てが可能となる支援を目指すことが重要であろう。

注

- (1)吉田 浩 (1999) 少子化と子育て・就業支援事業の効果の検証. 会計検査研究 NO.19. 9-22
- (2)清國祐二 (2008) 高度情報社会における子育て支援の新しい試みとその検証(3)～携帯子育て掲示板の運用指針についての検討～. 香川大学障害学習教育研究センター研究紀要 第13号. 41-52
- (3)浜崎隆司 他 (2003) 子育て支援の効果に関する保育者の認識—親への子育て支援効果について—. 広島大学教育学部幼年教育研究年報 第25巻. 87-94
- (4)池川昌子 (1999) 子育て支援と保育施策の検証. 堺女子短期大学紀要 NO.34. 9-34
- (5)小川圭子 (2009) 地域子育て支援センターの実践とその効果について. 日本保育学会62回大会発表論文集. 411
- (6)日坂歩都恵 他 (2007) 体験保育にみる地域の子育て支援(2)-子どもの一ヶ月体験保育後における生活習慣の変化. 日本保育学会60回大会発表論文集. 398、399
- (7)楠本洋子 (2008) 母親の子育て意識を変容する子育て支援に関する研究. 日本保育学会61回大会発表論文集. 625

引用文献

- (1)桜井智恵子 (2006) 家族教育政策における「地域社会の中の子ども」という論点の登場. 保育学研究 44 1号. 37
- (2)中谷奈津子 (2008) 地域子育て支援と母親のエンパワメント 内発的発展の可能性. 大学教育出版. 65
- (3)前掲(2). 62
- (4)日本保育学会 (2009) 戦後の子どもの生活と保育. 相川書房. 257
- (5)前掲(2). 58

*本研究は、研究開発指定（文部科学省 平成18～21年度）の一部によるものである。

謝辞

本研究に関わり、また、快く調査にご協力下さいました、幼稚園の教職員並びに保護者の方々に御礼申し上げます。